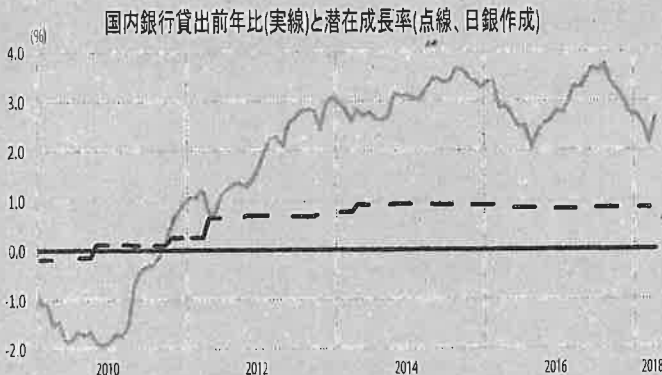


# オーブリン カレッジ

銀行貸し出しの前年比はこのところ2〜4%増と、わが国経済の実力を示すとされるGDPの潜在成長力である1%弱をかなり上回る伸びが続いている(図表参照)。しかしながら一方で、銀行収益は厳しさが増していると報じられている。銀行の本業である貸し出しが堅調であるにも関わらず、銀行収益が厳しいというのは納得できないという方も多いであろう。そこで、こうした状況について、銀行貸し出しのサイドから説明してみたい。

## 銀行貸出堅調の裏側



人口減や企業・個人の日本経済の先行きに対する慎重な見方を背景に伸び悩んでいるため、銀行の貸出積極化は、結果的に貸出金利の低下を招き、さらには日銀のマイナス金利政策とも相まって、銀行収益の悪化につながることになる。実際、貸出金利を被説明変数として計量的に分析しても、預金の増加は金利に対してマインナス方向に強く働いている一方、景気要因は金利に対してプラスに働いていないことが実証される。

さらに、銀行店舗数をみると、バブル崩壊以降減少が進んでいたが、ここ10年ほどについては頭打ちで、東京、愛知といった大都市圏や地域の核となる中核都市圏の一部では、むしろ小幅ながら増加している。こうした地域では、銀行間の店舗競争の度合いを示す店舗ベースのハーフィンダー

## なぜ、今

# 銀行業が厳しいのか

出しが伸びているのかを考えよう。確かに、景気は、各種指標からみる限りは、力強さにごそ欠けているものの、緩やかな改善が続けていることは事実である。しかし、こうした景気要因

植林 茂  
山女学園大学 現代マネジメント学部准教授



うんばやし・しげる 金融。埼玉  
大学大学院経済科学研究科博士後期課程修了。経済学博士。日本銀行調査役、山形事務所長、調査統計局調査主幹などを経て現職。1958年生まれ。

加といった面よりも、預金の大幅な増加により銀行の預貸バランスが変化し、これが貸し出しの増加につながっている部分の方がはるかに大きいことが判明している。すなわち、個人年金や企業の内部留保の増加を背景に銀行預金が好調に増加する中、銀行は、これら資金を貸し出しで運用できなければ、残った部分は金利ほぼゼロの国債やインターバンク市場で運用せざるを得ない状況に陥っている。こうした事情が、貸し出しに注力するインセンティブとなっているのである。

しかしながら、資金需要は妥当であろう。